様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１２４５０

研究課題名（和文）学術目的のための英語コミュニケーション活動への口頭フィードバック手法のモデル化

研究課題名（英文）Modeling oral feedback methods for communication activities of English for academic purposes

研究代表者
岡田　悠佑（OKADA, Yusuke）

大阪大学・大学院人文学研究科（言語文化学専攻）・准教授

研究者番号：７０５５１１２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、学術目的のための英語（English for Academic Purposes: EAP）授業でのコミュニケーション活動に対する教師の口頭フィードバック手法をモデル化することにより、EAP教育の質向上に貢献することである。実際の大学EAP授業の会話分析により、「学生の学術発表に対するどのような教師のフィードバック手法が学生の学術的社会化を促すのか」を分析した。結果、学生の不適切なやり方を再現し、問題元を体験させるという相互行為手続きによって、学術的社会化を促進できると分かった。微視的分析の実例から学ぶことで、教師のEAP授業・教室での相互行為能力が涵養されると結論づけられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
小学校からの「外国語」教科化そして中学・高等学校の学習指導要領の改訂を受け、我が国の多くの大学で「一般的な英語」から「学術目的のための英語（EAP)」を身につけるための英語授業が現在盛んに行われている。この流れに対して、EAP授業に必要な教師の能力ということは十分に議論されていない。本研究はこの教師の能力を学術発表に代表されるコミュニケーション活動への口頭フィードバックのやり方という具体的な相互行為能力として会話分析という微視的・相互行為的視座を用いて明らかにすることで、我が国の英語教育そして英語教育研究の発展に寄与するものである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the present study is to contribute to the enhancement of English for Academic Purposes (EAP) classrooms by presenting a model for teachers' oral feedback techniques during communicative activities in EAP settings. Through the microanalysis of video-recorded EAP classes using conversational analysis, this study investigated the types of teacher feedback methods employed during students' academic presentations that facilitate students' academic socialization. The findings revealed that when teachers employ an interactive approach that allows students to personally experience the trouble-source of their incorrect presentations makes the teacher’s feedback a catalyst for the students’ academic socialization. It can be concluded that teachers' EAP classroom interactional competence can be cultivated by learning from the actual examples presented in this study how to gather students' orientations to specific constructs of EAP.

研究分野：英語教育学

キーワード：英語教育　学術目的のための英語　会話分析　フィードバック　学術的社会化　相互行為能力　教師教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

学術目的のための英語（English for Academic Purposes: EAP）教育では、学術分野での学びに必要な語彙や表現に加え、効果的な情報発信に必要な論理や構成などの内容面も学習対象となるため、EAP 授業ではプレゼンテーションやディスカッションなどを組み込んでいる。そうした学習者が取り組むコミュニケーション活動の出来に対して行われる教師からの口頭フィードバックは EAP としての英語力養成に大きな教育的役割を果たすと考えられるが、そのフィードバック方法に関する研究が不足している。教師の口頭フィードバックによる学習者の EAP 能力涵養方法は、「行為の中の知」としての実践知であり、尋ねて明らかにできるものではない。それは実際のフィードバック場面において相互行為のやり方として表れるものである。話者が発言や非言語行為を駆使して相互行為の中で物事を組み立てる能力として実践知を捉え、その組み立て方を解明し評価する研究手法による研究がなされることが必要である。そして教師の口頭フィードバックが、例えば学習者の次のプレゼンテーションにどう波及したのかという縦断的視点、また例えば学習者のプレゼンテーションに見られる様々な問題に対して口頭フィードバックが教師ごとにどのようになされており、それぞれを比べると何が一番効果的なのかという横断的視点からの研究が必要である。

研究代表者は録画録音された実際の英語授業を微視的分析手法である会話分析によって分析し、教室内相互行為を分析し、教師の教室を学習に富んだ環境とするための相互行為手続きを明らかにしてきた。さらに調査対象となる EAP 授業の採集を進め、会話分析を基軸とした EAP 授業における教師の口頭フィードバック研究の準備を整えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、EAP としての英語能力向上に適切な口頭フィードバック手法の包括的視点によるモデル化を通じて、EAP 教育の質的向上に寄与することである。横断的・縦断的な EAP 授業ビデオデータコーパスの構築、そして会話分析によるコーパスデータでの教師の口頭フィードバック手法の横断的かつ縦断的分析・評価により、上記目的の達成を目指す。

３．研究の方法

複数の大学における EAP 授業を対象に動画による研究資料採集を行い、音声情報だけでなく非言語情報も含めたマルチモーダルなトランスクリプト (文字資料化) を行った。最終的なデータ規模は 2 つの国内大学での EAP 授業 277.5 時間分となった。これは断続的なものではなく１学期 15 回の授業を通した 12 の正規科目で構成されており、横断的な分析に加え縦断的なものも可能となっている。これらの研究資料をマルチモーダルな点にまで着目した会話分析によって分析し、フィードバックを受ける学習者 (学生) の視点からの教師の口頭フィードバックの意義を明らかにする。

４．研究成果

研究機関全体を通じて実施した研究の成果は次の 3 点である。

(1) 視覚的に再現可能な問題に対する口頭フィードバック手法の解明

学生のアカデミック・プレゼンテーションに対する口頭フィードバックは、本質的に課題後、つまりプレゼンテーションの完了後に行われるため、プレゼンテーションの中で何が問題であったかということを示すことがまず必要となる。その上で、一方的な説明ではなく、どのような原因でどのような学術的知識の欠如がその問題を引き起こしているのか、ということを理解させることが、学生に改善を促し学術的社会化を促進するためには欠かせないものとなる。プレゼンテーションに用いたスライド資料の配色や文字の大きさ、見出しの有無などの視覚的に再現可能な問題の場合は、スライドを巻き戻した上で観客側に発表者である学生を移動させて見直させるといったフィードバック手続きにより、教師が発表者である学生に加えて観客側の学生も含めて学術的社会化を測ることができること方法の解明を行った。次の抜粋１はその一例で、スライド資料の配色が悪く観客側から見えない、という問題を、発表者である学生に加えて全学生に見えるように再現し、さらに観客側へ立ち位置を移動させ、さらに観客側からの視点を実演して見せることで、なぜ配色が悪いことが問題なのか、何がその問題を引き起こしているのか、を体験的に理解させている。

抜粋１

```
01  T:  で, えっと ヨウイチくん は: >一番-< アニメーションの使い方うまかったと
02      思います.
03      (0.5)
04  T:  で .hh >ひとつ残念< だったのは: ちょっとスライド +戻ってもらって:,
```

```
    y                                          +立ち上がる-->
05        +(0.3)                 +(1.1)  +(0.5)
    y   -->+手を伸ばし机のポインタを取る---+席に戻る-+スクリーンに向き直る-->
06        +(2.6)       *(0.9)           *(0.3)  *
    y    -->+スライドを巻き戻す-->
    t                      *スクリーン正面まで移動*立ち止まる*
07  T:   *↓う:ん* 次- *>うん< * +#ここか.
    t    *頷く--*      *二度頷く*
    y                      -->+
08  T:   ちょっと- *うん 出てきて:*  * ここまで.          *
    t            *Y を手招きする*   *自分の隣の位置を指差す*
09      +(0.7)   +(4.8)         +(0.2)
    y    +席を立つ--+T の隣まで移動する-+振り返ってスクリーンを見る-->((15 行目まで継続))

10  T:    *なにが↑残↓念そう?
    t     *ヨウイチの顔を見る-->((14 行目まで継続))
    y                    -->

 11      (0.3)
    t:     -->
    y      -->
12  Y:   緑色に白文字.
    t           -->
    y           -->
13  T:   %そう!%              *%あれ:
    t   ((10 行目からの視線))-->*スクリーンの方を見る-->
    t    %頷く %                %スクリーンを指差す-->
    y                                        -->
14  T:   見えない*%よね,
    t         -->%
    t        -->*T の右側に学生に顔を向ける-->((16 行目まで継続))
    y                                -->
15  T:             たぶん見えφな+#い:φ
    t                        -->
    t                     φ二度頷くφ
    y   ((9行目からの視線))-->+T の右側の学生の方を向く-->
    fig                        #図 1
```

```
16  T:                   <この辺*から+だ¢と>         ¢#
    t   ((14 行目からの視線))-->*スクリーンを見る-->>
    y           -                  ->+スクリーンの方を向く-->>
    y                                  ¢二度大きく頷く¢
    fig                                          #図 2
```

(2) 抽象的・概念的な問題に対する口頭フィードバック手法の解明

研究資料の中での学生のアカデミック・プレゼンテーションの問題の多くは、例えば不明瞭な発表目的や発表の全体を貫くストーリーの揺らぎといった視覚的に再現不可能な問題であった。そういった抽象的・概念的な問題に対する口頭フィードバックも、教師からの一方的な説明ではなく、学生になぜ問題なのかを体験させることが必要である。目的の不明瞭な発表という問題に対しては、フィードバック途中に脈絡のない学生に話かけ、その話の後で学生がどのように思ったかを学生の声を描出して見せるという「謎解き連鎖」に学生を引き込むことで、学生に抽象的な学術知識の重要性を体験させ、学術的社会化を促すことができることを解明した。この際、学生の姿勢や顔の向き、笑いなどのマルチモーダルな表象を相互行為連鎖の中で突き止めることが、学生の理解を根拠のある形で示すために重要であることも明らかにした。一例として、次の抜粋 2 では、不明瞭な目的という問題の重要性を体験させるべく、教師はフィードバックの途中で急に内容をシフトして全くかけ離れた話を語り、その行為を学生に謎として投げかけた上で、「今の時間何って思ったでしょう?」と謎への解を提示しする。そうすることで学生から行為連鎖の中の適切な位置でのマルチモーダルに示される理解を得ている。

抜粋 2

01 T: #ってわけで 目的をもうちょっとはっきり言う っていうことを考えてやってみると
02 より (.) まとまると思います. だって (0.7) はっきり言って:: (.) あの::
03 僕 (.) 今日聞いた話 全部, あの::: (0.4) どの話とかどのトピックとかもう
04 ↓う:::ん ↑どっかで聞いたことがあるんですよね. この授業とかこの授業以外で,
05 だから ↑新しいことってはっきり言ってない
06 (.) #(0.2)
fig #図 3

07 T: ですけれども:: その上で:: そういった人たちに- 対しても:: (0.7) このために-
08 え:::っと こういう話があって:::, 何のためにこれをするのか, っていう
09 ストーリーを作って話す (0.4) っていう風にするために目的はしっかりと.
10 (0.3)
11 T: っていうようにしましょう.
12 (.) #(.)
fig #図 4

13 T: 目的なく話されても (0.2) んで何? (.3) ↓って感じでしょ.
14 あ例えば- (0.9) ガンダム (0.5) って知ってますか +%ガンダム.%+
s1 +頷く +
s2 %頷く %
15 T: 知って+%る?%+
s1 +頷く +
s2 %頷く%
16 T: ガンダムウイングっていう 20 年前くらいの作品があるんですけれどもね.=
17 5 人: 主人公がいて (0.8) で::: 一話目でなんとね, (0.2) その (0.2) 主人公の
18 ヒイロユイ (0.4) っていうのの乗ってる機体が:: 大破するんですよね. >だから

19　　ガンダムの< (.) 主人公の機体出てこないんです.
20　　(.9)
21　T:　で ↑いつ出てくるのかな:: と思ってたら <だいぶ経ってから:,> .hhh 敵に修理して
22　　もらって出てくる. .hh んですけどれも:: 面白いんでぜひ見てください.
23　　(0.3)
24　T:　って言ったって:: (0.5) *今この時間　　*何って
　t　　*腕時計を見る--*顔を上げ学生の方を見る-->
25　　£思ったでしょ[う この時間£*
　t　　-->*
26　TA:　　[heheheheh
27　Ss:　　[huhuhuhuhuhuhuhuhuhu #
　fig　　#図５

28　T:　だ(h)か(h)ら £何のために話すのかっていうのをよく考えて£ (.) 言ってみて.
29　　=↑あと一歩 あと一歩なんですみんな. あ ( )よくできてるんですその一歩だけ
30　　できたら::だいぶ違うようになってくるんでやってみてください.
31　　ϕ(0.2)ϕ#
　ss　ϕ頷く　ϕ

(3) 縦断的な口頭フィードバック効果の検証方法

抽象的・概念的な問題に対してフィードバックが為された場合、学生は即座にフォードバックを反映してプレゼンテーションを行うことは難しい。例えば、フィードバック直後に学生がフィードバックを反映して論文全体のストーリーを組み立て直して発表するということはできるものではない。したがって、フィードバックがどう反映されたか、ということは通常は次回授業でのプレゼンテーションで確認することとなるが、各授業の間に時間的隔たりがある限り、例え問題が解消されていたとしてもそれは真にフィードバックの効果なのかどうかは決定できない。この問題を解消し縦断的な口頭フィードバックを確認する方法として、学生のプレゼンテーションだけではなく、学生の学習ジャーナルでのコメントや口頭でのピア・フィードバックなどから、学生がフィードバックで体験した学術的知識をどのように使ってお互いを評価できるか、というが専門家の見識の前景化を見るべきである、ということを明らかにした。この研究成果は現在、雑誌論文としてまとめているところである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 岡田悠佑	４．巻 44
２．論文標題 フィードバックによる学術的社会化―EAP授業における教師のポスト・パフォーマンスフィードバックの会話分析	５．発行年 2022年
３．雑誌名 JALT Journal	６．最初と最後の頁 107-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.37546/JALTJJ44.1-5	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岡田悠佑	４．巻 －
２．論文標題 専門家主導の「謎解き」連鎖を通じた学習者の社会化 ．言語文化共同研究プロジェクト	５．発行年 2021年
３．雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト2020 『応用会話分析研究 ―相互行為的視座からの教育と学習』	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岡田悠佑	４．巻 －
２．論文標題 アクティブ・ラーニング型英語授業におけるTAの教育的意義の構築：フィードバック場面での「協働」をめぐるスタンス	５．発行年 2020年
３．雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト2019『応用会話分析研究―制度的会話におけるスタンスの構築と役割―』	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/77028	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 岡田悠佑	４．巻 1
２．論文標題 「話し手の語りに対して聞き手が言いうる発話」を話し手が演じること―英語授業での教師による描出発話―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 言語文化研究科共同プロジェクト2018 『応用会話分析研究 ： 制度的会話におけるカテゴリー化と連鎖構造』	６．最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/72759	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 岡田悠佑
２．発表標題 実演による学術知識の指導と学習： EAP授業におけるポスト・パフォーマンスフィードバックのマルチモーダル会話分析
３．学会等名 第４回JAAL in JACET（日本応用言語学会）学術交流集会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Yusuke Okada
２．発表標題 Socializing students into academics: Teachers’ feedback practices for EAP classroom presentation
３．学会等名 Sociolinguistic Symposium 23（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 三木訓子，岡田悠佑
２．発表標題 大阪大学におけるオンライン型「プロジェクト発信型英語」授業の試み―同期および非同期型英語授業でのアクティブ・ラーニング―
３．学会等名 JACET60周年記念国際大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Yusuke Okada
２．発表標題 Microanalysis of team-teaching with TA in EAP
３．学会等名 The Japan Association for Language Teaching
４．発表年 2020年

１．発表者名 岡田悠佑
２．発表標題 「聞いている」以上を引き出すために―学術目的のための英語授業における教師のフィードバックの会話分析―
３．学会等名 第2回JAAL in JACET学術交流集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 OKADA, Yusuke
２．発表標題 Managing learning opportunity and motivation in interaction: Teacher's sequential practice in post-performance feedback in EFL classrooms
３．学会等名 FLEAT VII（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yusuke Okada
２．発表標題 A conversation analytic study of pedagogically and socially preferred post-performance feedback practices in EAP classrooms
３．学会等名 Japan Association for Applied Linguistics
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関